

## 都市メディア論⑧「都市と映画」（その4）

### 事例研究：『男はつらいよ』をめぐって

～資料編2・ロケ地（第25～48作）～

水 野 博 介\*

#### <目 次>

- 1 本稿の目的
- 2 『男はつらいよ』第25～48作までのロケ地
- 3 分析のための覚書き
- 4 結語

#### 1 本稿の目的

本稿でも、前稿に引続き、1969（昭和44）年～1995（平成7）年まで、27年間全48作にわたって作り続けられた「寅さん映画シリーズ」こと、映画『男はつらいよ』（監督は大部分、山田洋次）を取り上げる。

前稿では、全48作の前半の24作（公開時期は1969年8月～1979年12月の11年間）を一通り見た上で、既存の文献を参照して、「分析」の手がかりとなる「資料」の整理を行った。

本稿では、それに引続き、全48作のうちの後半24作（公開時期は1980年8月～1995年12月の16年間）について、同様な試みを行う。前半の24作についてと同様、その際の眼目は、この映画シリーズで、どのようにしてロケ地が選定されたのか、ということ記録や証言などを通してできるだけ明らかにすることである。

#### 2 『男はつらいよ』第25～48作までのロケ地

前稿にも記したが、寅さん映画シリーズ『男はつらいよ』（全48作）の「ロケ地」がどこであったかは、改めて調べる面倒を重ねなくとも、既成の諸文献に記されている（例えば、川本2005年や松竹2005年）。また、今回気づいた（前稿は、時間に追われていたため、直接に個々の作品からロケ地を調べようとして見落としていた）が、『男はつらいよ』松竹公式サイト<sup>1</sup>には「寅の巻活用術 ロケ地」という情報が記載されており、作品毎にまとめられてはいないが、都道府県別にロケに使われた場所のデータと使われた作品の第何作かが記されている。「公式サイト」であるから、作品内の映像を見ただけでは分からないような場所の正確な名称などがわかり、便利である。ただし、他の文献と照合すると、すべての場所を網羅しているわけではないことがわかる。また、場所名とどのようなシーンかという、簡潔な記述だけ（例：高梁市「備中高梁駅 博とさくら、降り立つ（第8作）」「武家屋敷通り 博の実家（岡村邸）（第32作）」）であり、なぜそのような場所が使われたのかといった、ストーリーのなかでの位置づけや雰囲気などの、より奥行きのある情報には欠けている。これらは、他の文献によって、あるいは実際に作品を見ることによって、補うべき情報である（※）。

〔（※）より詳しい情報が、各作品の「今回の寅さん」

\* みずの・ひろすけ

埼玉大学教養学部教授、メディア論

の頁のさらに「夢・騒動・旅」の中にあった。簡素ではあるが、ロケ地がすべて網羅されているようである。]

それ故、ここでは、既存のサイトおよび文獻に記されているロケ地関連の情報を集めてリストアップする。また、それぞれの場所に関して諸文獻に記されているコメントに加えて、この小論の筆者のコメントも付すことにする（特に誰と記していない感想がそれである）。

要するに、ここでの作業は、地方ロケの場所に関して、ばらばらに記述されている「断片」を寄せ集めて「パッチワーク」にするだけのことである。ただし、それらの情報に多少の「齟齬」や「漏れ」はあり、100%の信頼を寄せることはできず、それらを吟味・選別する必要がある。本稿に何か意義があるとすれば、そのようにして多少なりとも諸情報を「整理」して並べたということである。

以下では、映画『男はつらいよ』のメインタイトル部分は省略して「」内にサブタイトルを記し、ロケ地およびロケ地に関連した情報を示す。

## 第 25 作「寅次郎ハイビスカスの花」

(1980＝昭和 55 年)

ロケ地：長野県軽井沢町，群馬県北軽井沢，  
沖縄県那覇市 牧志第一公設市場，  
本部町，金武町

「リリーが入院した那覇市，首里の病院。現在にはオリーブ山病院になっている。」

(川本前掲書，81 頁)。

「[寅がテキ屋の] 店を開くのは，那覇の代表的な市場・第一牧志公設市場近くの四つ角。遠くに那覇タワーが見える。寅は他所者 [ヨモリ] なので市場のなかでは商売は出来ないのだろう。

市場にはゴーヤー，シークワァーサー，エラブウナギなど沖縄ならではの食材が豊富に並んで活気がある。」(同)

「群馬県 [吾妻 (アガツマ) 郡] 六合村 [ケムラ] の国道 292 号線の山道を草津方面に上がる峠の途中に，20 数年前に映画で使われたバス停がそのまま残っていた。」

(西川幸夫，川本同書，103 頁)

## 第 26 作「寅次郎かもめ歌」(1980＝昭和 55 年)

ロケ地：北海道江差町，奥尻島，徳島県鳴門市

「寅は，顔見知りの地元のテキ屋が死んだことを知る。」「そのテキ屋が，江差の沖に浮かぶ奥尻島に住んでいたと分かり，線香をあげに船に乗る。」「奥尻島は北海道にある五つの島のひとつ。利尻島に次いで大きい。」

(川本同書，82 頁)

「死んだテキ屋には娘 (伊藤蘭) がいてイカの加工工場で働いている。その娘が寅を父親の墓に案内する。島の北端，賽の河原と呼ばれる寒々とした海辺に墓標がぼつんと立っている。渡世人の寂しい死が胸に迫る名場面。奥尻島は 1993 年に大津波で被害を受けている。」(同)

ここでは，心理描写にふさわしいロケ地が選ばれている。

## 第 27 作「浪花の恋の寅次郎」

(1981＝昭和 56 年)

ロケ地：大阪府大阪市天王寺，同東大阪市石切町，生駒山，広島県大崎下島豊町北堀・豊島，長崎県対馬市

「寅が船で瀬戸内に行く。銭湯のペンキ絵にあるような海に浮かんだ島々の穏やかな風景のなかを船がゆく。寅の旅にはのんびりとした旅と，寂しい旅があるが明るい瀬戸内では，のんびりした旅になる。」(川本同書，83 頁)

「丘の上から港が見渡せる。神社の鳥居や瓦屋根の家並みが観客の目もなごませてくれる。」

「丘の上に墓がいくつかある。日傘をさした美しい女性，ふみ (松坂慶子) が墓参りに来る。」

早速、寅は親しくなり、島の横丁や路地を歩く。そしてふみに見送られ、船に乗って島を去ってゆく。のんびりした日帰りの船旅である。小豆島の隣の豊島〔テマ〕で撮影されている。」(同) この豊島は広島県の豊島であって、香川県の豊島ではなく、誤りである。

なお、ここに引用してはいないが、この作品について佐藤(1992年、253頁)は「豊島」を「対馬」だと誤解して、そう書いていると思ったが、確かに、ふみは対馬の寿司屋に嫁いでいるようだ(松竹公式サイト)。

#### 第28作「寅次郎紙風船」(1981=昭和56年)

ロケ地：大分県日田市、夜明温泉、福岡県久留米市、久留米水天宮、静岡県焼津

「久留米と大分を結ぶ JR 久大〔キュウダイ〕線に夜明〔ヨアケ〕という面白い名の駅がある。筑後川に近い(大分県日田市)。

秋が深くなった一日、寅はこの駅に降り立つ。寅も駅名に惹かれたのだろう。町で商売をし、夜、筑後川に沿った商人宿に泊る。」

(川本前掲書、84頁)

「宿で一人旅の娘、愛子(岸本加代子)と相部屋にさせられる。焼津の家を飛出して来た家出娘だと分かる。人なつこい娘で、次の日、寅に付いてくる。二人は筑後川に沿った、田主丸〔タヌマル〕(植木の町として知られる)の町を歩く。」(同)

「ふたりが泊まった柳川・沖端川沿いにある旅籠〔ハコ〕「沖吉」は実際には存在せず、普通の民家に看板をつけたもの。寅さんに置き去りにされた愛子が地団太を踏んで悔しがったシーンは、その対岸にある小さな船の係留場で撮影された。

筑後川と矢部川の三角州に浮かぶ水郷・柳川は、立花藩 12 万石の城下町。詩人・北原白秋が生まれ育った町」(松竹、123頁)

「久留米の水天宮で商売をした寅はそこで、昔のテキ屋仲間、常三郎(小沢昭一)の女房〔光枝〕(音無美紀子)に会い、常三郎の容態が良くないことを知り、見舞いに行くことにする。

常三郎の家は福岡県甘木市の秋月にある。明治初年の士族の反乱、秋月の乱で知られる古い城下町。武家屋敷が残る古い家並みは西の小京都と呼ばれている。」(川本前掲書、84頁)

「[見舞いの後の寅を女房が追ってきて、夫の命の先が短いことを告げるシーンは] 眼鏡橋と言う古い石造りの橋の袂で撮影されている。」

(同)

「映画では寅さんと光枝が歩くこの〔秋月〕郷土館前を、子どもたちが走り抜けて行く。」

(西川幸夫、川本同書、106頁)

「筑前の小京都」といわれるこの町は、野鳥〔ノトリ〕川沿いにつくられた静かな城下町。」「郷土館も武家屋敷を利用したものという。」(同)

ストーリーには関係なく、ひたすら懐しくも美しい景観が提示されていると言えよう。

#### 第29作「寅次郎あじさいの恋」

(1982=昭和57年)

ロケ地：長野県木崎湖、白馬村、京都市加茂川河畔、京都府伊根町、神奈川県鎌倉市、藤沢市、滋賀県彦根城址

「寅は京都で、一人の老人に親切にしてやって感謝される。寅としては哀れな身の上の年寄りぐらいに思っていたが、実は一流の陶芸家の大先生(片岡仁左衛門)だった。その家に泊めてもらっても寅は、そこをぜいたくな旅館と錯覚していたりする。」(佐藤前掲書、255頁)

「この映画では寅は、舟屋で知られる丹後半島の伊根町(京都府)を旅する。京都で知り合った寂し気な未亡人、かがり(いしだあゆみ)を追って、彼女の故郷の伊根に行く。」

(川本前掲書、85頁)

「伊根湾という入江のような海に面した小さな漁師町。普通は宮津から船で行くが、寅は宮津で間違っ山陰本線に乗ってしまい、豊岡(兵庫県)からバスで遠回りしてやってくる。」(同)

「かがりの家は機屋 [ハヤ]。伊根は丹後ちりめんでも知られるところ。それを踏まえている。平田という集落にある。」

海にせりだした駒形の舟屋が何軒も並んでいる。一階が海に向かっての舟倉(車の車庫に当たる)。二階が住居。山が海に迫り、平地が少ない土地に合っている。湾内から見ると家が海に浮かんでいるように見える。」(同)

「かがりの実家として映画に登場したのは、伊根町で機織り業を営む白数 [シス] 真一さんの舟屋。」「この伊根湾を囲む舟屋はおおよそ 230 軒。沿岸漁業で生活するのに適した機能的な作りの舟屋は、舟のガレージ兼物置にも使用するという。」(西川幸夫、川本同書、106 頁)

同じ京都府でも、古い都のぜいたくな家屋と、日本海沿いの、ひなびた家の対照が見られる。

### 第 30 作「花も嵐も寅次郎」(1982=昭和 57 年)

ロケ地：大分県臼杵市 [ウシ]、福良天満宮、  
大分県別府市・由布市、鉄輪 [カナリ]  
温泉

「この映画では大分県、豊後路 [ブンゴジ] を旅する。」

別府温泉の奥の鶴見岳でハングライダーを見物したあと、臼杵の石仏(平安から鎌倉期に作られた)を見にゆく。観光旅行したあとは商売。

古い町並みが残る臼杵の町に出る。小京都というより、海が近いので小鎌倉と呼びたい町。」「昭和の代表的作家、野上弥生子の故郷でもある。」(川本同書、86 頁)

「寅が商売をする場所は、海を見下ろす丘の上にある福良 [フク] 天満宮。」(同)

「寅はそのあと久大本線の湯平 [ユヒラ] 駅に

近い昔からの湯治場、湯平温泉のなじみの宿に泊り、そこで旅行中の東京のデパートの店員(田中裕子)に会うことになる。

湯平温泉は、花合野 [カゴノ] 川沿いにあり、石畳を挟んで小さな旅館が 50 軒ほど軒を並べる。」(同)

「(寅さんとマドンナ螢子(田中裕子)が、偶然車を運転する三郎(沢田研二)と再会する城下町・杵築の志保屋の坂)

三郎が車でこの坂を下っていると、右手の石垣の上の螢子と再会する。そしてその向こうの路地から寅さんも現れる。杵築のこの辺りは丘になっていて坂が多いが、車が通れるのはここぐらい。正面の坂は酢屋の坂といい、左右に武家屋敷が並び、城下町の風情を色濃くとどめていた。」(西川幸夫、川本同書、107 頁)

「臼杵市街が一望できる福良天満宮の参道には、撮影の記念碑が立つ。石壁の左手前で寅さんはパイをする。」(同)

久大本線は、第 4 作と第 28 作にも登場している。由布市も第 4 作に登場している。

### 第 31 作「旅と女と寅次郎」(1983=昭和 58 年)

ロケ地：新潟県新潟市一番堀通町、県民会館、  
新潟県佐渡、北海道後志支庁羊蹄山

「オープニングの『男はつらいよ』のテーマが流れるところで細川たかしが特別出演。矢切の渡し舟に乗る。」(川本同書、142 頁)

「ふらりふらりと一人旅を続ける寅次郎は、旅先の佐渡で、なにか思い悩んでいる京はるみ(都はるみ)とめぐり会う。はるみが旅公演の途中失踪し演歌の女王といわれていることも知らない寅次郎は、持ち前の優しさに励まし、やがてふたりは、美しい島で、夢のような数日間を過ごす。」(同)

「この回のメインロケは佐渡島。映画では出雲崎の港から、寅さんと京はるみ(都はるみ)

が漁船に乗って佐渡に渡る。はるみは逃げているわけですから出来るだけ目立たない港、それでいて佐渡らしい景色のいい場所が欲しかったのです。そして宿の主人に島の人も歩かないような山道や岩場を案内してもらい、見つけたのが小木地区・宿根木〔シュクネギ〕の小さな民宿。たらい舟を浮かべて漁をしている小村で、隠れるにはもってこい。村の生活感溢れる路地や木造の古い家屋も見所です。」

（五十嵐敬司助監督、川本同書、97 頁）

「寅さんとはるみを乗せた漁船が「矢島・経島」にかかる赤いアーチ橋をくぐって入った小木の港では、はるみも乗ったたらい舟での舟遊びが楽しめる。」（松竹、118 頁）

### 第 32 作「口笛を吹く寅次郎」

（1983＝昭和 58 年）

ロケ地：岡山県総社市、高梁〔カハシ〕市、  
鳥取県江府町、広島県尾道市

「晩秋の吉備路を旅する寅次郎は、博の亡父の三回忌に備中高梁へ墓参に訪れた。」

（立川志らく、川本前掲書、143 頁）

「博の父親（志村喬）の家は、岡山県の山間部の古い城下町、備中高梁にある。」

（川本、川本同書、87 頁）

この川本の説明は実際の映画のシーンからすると少々おかしい。博の父はすでに亡くなっているという設定であり、家に行くのではなく、その菩提寺を墓参りに訪れるのである。

川本は、この説明の後に、備中高梁駅が、第 8 作『寅次郎恋歌』（1971）でも描かれていると指摘し、「山田監督はこの古い町の雰囲気が入ったのだろう。第 32 作も備中高梁で撮影している。人口四万人に満たない地方の小都市が二度も登場するのは珍しい。」（同）と述べている。しかし、この“珍しい”という指摘は、第 4 作と第 30 作で人口四万人弱の由布市が登

場したり、第 4 作と第 28 作及び第 30 作で久大本線が出てきたように、すでに以前にも出てきたところが再登場しているので、それほどでもない。なお、川本によれば、備中高梁駅の「駅舎は大正十五年（1926）に建てられたままで、木造の建物が心をなごませる（現在も当時のまま）。」（同）とあり、とても貴重な鉄道関連遺産だと思われる（山田監督は鉄道好きである）。

### 第 33 作「夜霧にむせぶ寅次郎」

（1984＝昭和 59 年）

ロケ地：岩手県紫波町、盛岡市、北海道釧路市、根室市、中標津〔カハヅ〕町、  
浜中町、札幌市

「寅は、霧の町、釧路で各地を転々としている理容師の風子（中原理恵）に出会い、霧多布〔キタツブ〕、根室と一緒に旅してゆく。」

（川本同書、34 頁）

「『どうせ拾った恋だもの』を歌ったあとに、『矢切りの渡し』を霧多布近くの駅で風子とデュエットする。」（川本同書、144 頁）

「弟分の登が盛岡で食堂をやって暮らしている。〔登役で〕秋野太作久しぶりの登場。」（同）

「登が今川焼の店を出していたのは、紺屋町の「上の橋」のほitori。近くにはあべ川もちの老舗「丸竹」もあり、古い町並みに城下町の風情を残している。」（松竹、116 頁）

「あけみ〔美保純〕の結婚式の場所は帝釈天題経寺。新婚旅行はハワイ。おいちゃんとおばちゃんが行く予定で行けなかった所（4 作）。」

（川本前掲書、144 頁）

この作品で「北海道の温泉がはじめて登場する」。「北海道東部、根室地方の中標津町にある養老午〔ヨウウシ〕温泉。」（川本同書、34 頁）

「標津線（厚床と根室標津を結ぶ）の中標津駅と上武佐駅は、平成元年（1989）四月に標津線が廃止されていまはもうない。」

(川本同書, 36 頁)

「この映画では、さくら夫婦と満男は、同じ標津線の計根別(ケベツ)という駅から養老午温泉に入っている。この駅もいまはなく、映画のなかにだけその小さな姿をとどめている。」(同)

「風子の披露宴が行なわれるのは「藤や」という実在の旅館。中標津の市街地から二十分ほど。林のなかの一軒家で、静けさと温泉の湯が最高のもてなしになっている。」(同)

なお、以下の記述は、「東京」の話であるが、記しておく。「寅さんが渡瀬恒彦のトニーに風子と別れてくれと頼む、うらぶれた漁船の並ぶ裏町の情景は名場面」(佐藤前掲書, 262 頁)だという。この映画では、東京にも、地方と同じような情景を見出して映し出しているわけだ。

#### 第 34 作「寅次郎真実一路」(1984=昭和 59 年)

ロケ地：茨城県竜ヶ崎市牛久沼、鹿児島県穎娃[エイ]町、吹上町、坊津市、霧島市

「上野の焼き鳥屋で、“<sup>ふとこ</sup>懐が旅先”の寅さんと奢ってくれたのは、仕事に疲れた証券マン、富永健吉(米倉斉加年)。律義な寅さんは御礼にと今度は御馳走するが、結局、茨城県牛久沼の富永宅に泊まる。」(松竹公式サイト)

「〈寅さんとポンシュウ[関敬六]が汽車の来ない駅で待つラストシーンの裏話〉

寅さんは、美しい人妻・ふじ子(大原麗子)と一緒に、蒸発した亭主を捜しに亭主の故郷、鹿児島県・穎娃町にやってくるという設定。脚本では映画の最後に、駅も登場するものですから探していると、吹上[フキゲ]町に木造の寂れたいい駅があった。いざカメラを向けると、なんと線路がないんです。調べると廃線になったばかりの南薩線の伊作駅。そのことを山田監督に話したところ「おもしろい」と。最後のシーンに使われたのです。」

(五十嵐敬司助監督, 川本前掲書, 98 頁)

「鹿児島鉄道の駅跡を訪ねて枕崎から加世田、吹上と北上。吹上町の伊作で見つけた駅。」(同)

#### 第 35 作「寅次郎恋愛塾」(1985=昭和 60 年)

ロケ地：長野県上田市、長崎県長崎市・上五島町・有川町、熊本県天草市、秋田県鹿角[カヅノ]

「九州は五島列島。古い教会のある漁師町を旅していた寅次郎は、老婆[初井言栄]の最期に立ち合う。」(立川志らく, 川本同書, 146 頁)

「彼女[=マドンナの樋口可南子]の故郷の五島列島の教会のある風景、彼[=平田満]の故郷の秋田県鹿角市の旧家のたたずまいなどもたのしめた。」(佐藤前掲書, 263 頁)

「江戸川の土手が物凄く整備されている。京成線にステンレス車両が導入される。」(立川志らく, 川本前掲書, 146 頁)

古い建物の残る地方と、近代化がさらに進む東京の対比がなされていると言えよう。

#### 第 36 作「柴又より愛をこめて」

(1985=昭和 60 年)

ロケ地：福島県会津若松市・柳津町、静岡県下田市、伊豆七島・式根島、静岡県浜松市

「家出したタコ社長の娘あけみを連れ戻しに下田へと旅に出た寅次郎、帰らないとダダをこねるあけみと伊豆七島行きの船に乗り込んだ。同窓会に出席する青年たちとともに式根島に降りた寅の前に、真知子先生(栗原小巻)が現れた。」(立川志らく, 川本同書, 147 頁)

「いちばんの名所は、地鉾[ジナ]温泉。海岸の岩場から湯が湧き出ている野趣豊かな天然の温泉。この映画で広く知られるようになった。」(川本, 川本同書, 88 頁)

この作品は、地味ながら美しいローカルな風景がメインだ。

第 37 作「幸福の青い鳥」(1986＝昭和 61 年)

ロケ地: 山口県萩市, 下関市, 福岡県門司港,  
飯塚市, 田川市, 神奈川県箱根町

「寅さんは、九州は飯塚に旅する。途中、隣町の田川で、遠賀〔オガ〕川に架かった木の橋を渡ろうとすると、向こうから「黒田節」の音楽とともに、馬がやってきて後ずさりする寅さん。その滑稽な動きが笑わせる。この橋は大水になると水中に沈む沈下橋らしいが、正式な橋名はわからなかった。」

(西川幸夫, 川本同書, 110 頁)

「寅次郎は九州の飯塚で美保(志保美悦子)という幸せ薄い女に出会った。たったひとりの肉親の父親も亡くなって、ひとり旧炭住に住んでいる。」(立川志らく, 川本同書, 148 頁)

この作品は、東京で出会うカップル(志保美悦子と長渕剛)の話が中心であり、地方より、むしろ東京の下町がメインの舞台になっている。

第 38 作「知床慕情」(1987＝昭和 62 年)

ロケ地: 秋田県角館市, 北海道札幌市, 弟子屈〔テシカ〕町, 中標津〔カハベツ〕,  
斜里町, 知床, 岐阜県岐阜市

「寅次郎は初夏の北海道・知床を旅している。」  
(立川志らく, 川本同書, 149 頁)

「ウトロの港は、帰郷したりん子が、おばさんと慕うスナック「はまなす」のママ・悦子(淡路恵子)や昔の友人たちと再会する場所でもある。ロケで「はまなす」に使われた家は、土産物店兼民宿「酋長の家」。経営者は悦子のモデルになった梅沢悦子さん」

(西川幸夫, 川本同書, 108 頁)

「大きな岩は、地元ではゴジラ岩と呼ばれ、ウトロのシンボルとなっている。」(同)

「日本に残された最後の本物の大自然と言わべき知床の風景もさわやか」

(佐藤前掲書, 266 頁)

この作品は、大部分が北海道の自然が舞台だ。

第 39 作「寅次郎物語」(1987＝昭和 62 年)

ロケ地: 大阪市天王寺, 和歌山県和歌山市・和歌の浦, 奈良県吉野山, 三重県伊勢志摩

「秀吉〔母を探す少年〕の母・おふで(五月みどり)が働いていたのは、〔中略〕賢島の船着き場にある真珠店。そしてエンディングのシーンは、縁結びの象徴・夫婦岩で有名な二見浦〔フタミガウラ〕。」(西川幸夫, 川本前掲書, 109 頁)

この作品は、和歌山・奈良・三重の「観光キャンペーン」のようなロケ地巡りが中心になっている。和歌山駅前のシーンでは「観光キャンペーン」の看板が映っている。

第 40 作「寅次郎サラダ記念日」

(1988＝昭和 63 年)

ロケ地: 長野県小諸市, 長崎県島原市,  
島原城

「初冬の信州を旅する寅次郎は、小諸駅前で出会った老婆〔鈴木光枝〕と意気投合、一宿の世話になる。」(立川志らく, 川本同書, 151 頁)

「家は亡くなったおじいさんの幽霊も住み着いているような萱葺き屋根のあばら屋…。さっそくロケハンに出かけて見つけたのが、小諸から真田方面に車で 1 時間ほどの山間の小さな集落。まさに脚本を地でいくような数軒の寂れた萱葺きや古瓦屋根の家。住んでいるのもお年寄りばかり。」(五十嵐敬司助監督, 川本同書, 99 頁)

第 41 作「寅次郎心の旅路」(1989＝平成元年)

ロケ地: 宮城県松島町・登米市・栗原市・栗原田園鉄道, ウィーン, アムステルダム, 静岡県沼津市

「タイトルバックの国内のロケ地がなかなか決まらず、一任される羽目になりました。監督

から、旅また旅の雰囲気を出したいので連絡船とローカル線をという要望に、ふと浮かんだのが故郷・宮城の松島と廃線寸前の栗原鉄道。松島の奥のほうの小島を結ぶ小さな連絡船と、田園の中を走る一両の玩具のような電車を監督は気に入ってくれたが、私は故郷のあまりの変わりようにがっかりしていたのです。なお、栗原鉄道は今も健在です。」

（五十嵐敬司助監督、川本同書、99 頁）

「[ローカル列車が]自殺者に気付いて急停車。場所は宮城県栗原郡栗駒町鶯沢（当時）。今や町は栗原市になったのだと。気に入っていた栗駒の名が消えたとは！」（同）

「みちのくで出会った心身症サラリーマン（柄本明）に気に入られた寅は、一緒に旅をしたいとダダをこねられて、うかつにも返事をしてしまった。まさか行き先が芸術の都ウィーンとは、夢にも思わなかった寅である。」

（立川志らく、川本同書、152 頁）

「ドナウ川のほとりで久美子（竹下景子）とふるさとの話をしながら田端義男の『大利根月夜』を歌う。」

（同）

「なんでもウィーンの市長が日航機内で“寅さん”の映画を見てファンになり、ぜひロケに来てほしいと働きかけてきて実現したものさうである。」（佐藤前掲書、271 頁）

「今回の“寅さん”は臆面もなく見事に観光映画になっていて、それでいて“寅さん”映画らしい味も失っていない。」（同）

「都会 [ウィーン] の景観は適当に切りあげて、郊外に出るとやっぱり寅さん映画らしい味になる。」（佐藤同書、272 頁）

#### 第 42 作「ぼくの伯父さん」（1989＝平成元年）

ロケ地：茨城県大子町、愛知県名古屋市、  
佐賀県佐賀市、吉野ヶ里、古湯温泉、

富士町、小城町、小城神社

「晩秋の九州を旅する寅は、浪人中のさくらの一人息子満男（吉岡秀隆）とバツタリ出会った。親子ゲンカの果てに家を飛び出したものの、行くあてもなく、高校時代ほのかに思いを寄せていた後輩の美少女泉（後藤久美子）の転校先である佐賀へとバイクを走らせてきたという。」

（立川志らく、川本前掲書、153 頁）

「この作品は佐賀県からの誘致でロケが決まり、ダムに沈む予定だった山里の面影の濃い富士町や、吉野ヶ里遺跡などの観光地、そして九州の小京都と呼ばれる小城 [杵] 町などを中心に撮影が行なわれました。ラストは小城神社で寅さんが正月のバイをするシーン。」

（五十嵐敬司助監督、川本同書、94 頁）

「富士町東畑瀬の橋。満男と泉は泉の母の実家をバイクで訪ねる。」（同）

「寅さんは郷土史学会の老人たちに引っ張り出されて吉野ヶ里へ。」（同）

#### 第 43 作「寅次郎の休日」（1990＝平成 2 年）

ロケ地：大分県日田市、小鹿田 [わだ]

「寅は小京都好き。地方の町で寺社が多く、昔ながらの町並みを残す歴史のある町を好んで歩く。」

アヴァン・タイトルで、夢から醒めた寅は、山間 [ヤマ] の陶器の里を歩く。大分県の日田市小鹿田 [わだ]。小鹿田焼で知られる。万事において和好みの寅は、陶器の里も好んで歩いている。

山里の小鹿田から日田市中に入る。三隈 [シマ] 川に沿って開けた水郷。寅は古い石の橋を歩く。」（川本同書、90 頁）

「憧れの乙女・泉（後藤久美子）の父親捜しの旅に同情した満男（吉岡秀隆）がついて行く。その若いふたりを追いかけて、泉の母親・礼子（夏木マリ）と一緒に一路大分県は日田市へと



向かう寅次郎。三隅川のほとりで再会した4人は旅館に1泊するハメになったが、そこで女さんに家族と誤解される。」

(立川志らく、川本同書、154頁)

「日田は江戸時代から木材の町として知られ、天領だったところ。ちょうど秋の「日田祇園祭」が行なわれている。そこに寅が現れて――。

日田はいまでも製材がさかん。それを踏まえて、泉の父親は日田の製材所で働いているという設定。

寅が満男と泉に日田の町で出会った日に泊まる旅館は、日田に近い、玖珠〔ク〕川に沿った天ヶ瀬〔アマガセ〕温泉。」(川本同書、90頁)

人口七万人の日田市は第28作にも一度登場しているが、この作品のロケ地はすべてこの市内にある。

#### 第44作「寅次郎の告白」(1991＝平成3年)

ロケ地：鳥取県鳥取市・倉吉市、岐阜県蛭川村 安弘見〔アビロミ〕神社、恵那峡

「傷心の旅に出た泉(後藤久美子)は鳥取で偶然に寅と出会った。一方柴又では、泉からの絵ハガキにただならぬ気配を感じた満男(吉岡秀隆)が家を飛び出していった。鳥取砂丘で再会したふたりは、寅に馴染みの料理屋でごちそうになる。」(川本同書、155頁)

「山陰の小京都・倉吉で、寅さんは泉に出会う。倉吉は鳥取県の中央部に位置し、周囲を温泉地に囲まれた緑豊かな町。白いしっくい壁に黒の焼き杉板、屋根には石州瓦という町並みから、山陰の小京都と呼ばれる。〔中略〕泉が豆腐を買うために通る道で、道脇を流れる小川にはたくさんの鯉が泳ぐ。」

(西川幸夫、川本同書、110頁)

「〔映画の〕冒頭、川底が透き通って見える清流が映し出され、そこに寅のナレーションが入る。「私は川のほとりで生まれ、川で遊び、川を

眺めながら育ちました。」(川本同書、91頁)

「美しい川の流れに誘われるように、寅はテキ屋仲間のポンシュウと列車を途中下車する。駅前に商店が二、三軒だけの田舎の小さな駅。

「落合川駅」とある。中央本線が木曽川に沿って走る岐阜県の駅。中山道の落合宿は、工藤栄一監督『十三人の刺客』(‘63年)の舞台でもある。

駅を出た寅とポンシュウは木曽川に下りて、恵那峡下りの船に乗る。観光船ではなく、地元の人が乗る小さな船。「川っ子」の寅は、岩をぬって流れる川の美しさに心を遊ばせる。

恵那峡のすぐ近くに蛭川村という山村がある(2005年2月に町村合併で中津川市になった)。寅は最後、この村に行き、四月に安弘見〔アビロミ〕神社で開かれる「杵振り祭り」で商売をする。小さな神社だが、馬が石段を駆け上がる珍しい祭りを見る人でにぎわっている。寅がこんな山奥まで旅しているのに驚くが、地元のファンが寅さんを誘致したのだという。」(同)

#### 第45作「寅次郎の青春」(1992＝平成4年)

ロケ地：宮崎県青島、日南市油津・飢肥〔ウヰ〕、油津運河、宮崎県串間市、岐阜県下呂町

「日本にまだこんなに静かな、いい町があったか。宮崎県日南市にある油津。飢肥〔ウヰ〕城下の外港として江戸時代から栄えた。飢肥杉や日向和紙の積み出し港。古い町並みを残している。

秋の1日、寅がぶらりと現われる。町のなかを堀川(油津運河)が流れてゆく。そこに古い石の橋が架かっている(乙女橋という)。橋の上から運河を見ると、木材を組んだ筏がポンポン蒸気船で運ばれてゆく。現在ではもう見られないという。」(川本同書、92頁)

「橋の袂に理容店がある。寅は女主人、蝶子(風吹ジュン)に、散髪をしてもらう。港町の

人間は他所者 [ヨソノ] に慣れているのだろう、  
金のない寅を家に泊めてくれる。町がいいと、  
住む人間もいい。

一日のつもりが居心地がよく居候してしまう。  
蝶子の案内で、飢肥城も見物する。小さな港町  
の落ち着いた雰囲気には寅はなじんでゆく。

蝶子には船乗りの弟（永瀬正敏）がいる。仕  
事に出る時、家の裏口から船に乗ってゆく。昔  
の暮しが残っている。

理容店は実在しないが、寅がはじめて風吹ジ  
ュン演じる蝶子に会う食堂「いづや」は健在。」  
（同）

「宮崎県の日南海岸にある小さな港町・油津  
で、寅さんは理髪店を営む蝶子の家に居候する。  
蝶子と寅さんはこの堀川運河に架かる堀川橋の  
中央で、ぼんやりと川を眺める。」

（西川幸夫、川本同書、105 頁）

川本と西川とで、おそらく同じ橋を指してい  
るのであろうが、呼び方が違っている。名称の  
特定は難しい。

#### 第 46 作「寅次郎の縁談」（1993＝平成 5 年）

ロケ地：<sup>カラス</sup> 栃木県 烏山町、香川県三豊市、琴平  
町、高松市、多度津町、牟礼町、土庄町 富丘  
八幡宮

「瀬戸内海の琴島。階段道を降りてきた美し  
い女、葉子 [松坂慶子]。」

（立川志らく、川本同書、157 頁）

「琴島」とはどこであろう？

「寅さんは葉子と琴平参りに出かけ琴電に乗  
る。車内には、四国八十八か所巡りのお遍路さ  
んも乗っている。車外には、琴電の通る讃岐富  
士、そして高松の銘菓「灸まん」の看板」

（西川幸夫、川本同書、105 頁）

#### 第 47 作「拝啓 車寅次郎様」（1994＝平成 6 年）

ロケ地：新潟県上越市 春日山神社、

滋賀県長浜市、神奈川県鎌倉市、  
長崎県雲仙市

「甥の満男（吉岡秀隆）が、営業の仕事に行  
き詰まりを感じているという。気分転換に満男  
が向かったのは、先輩がいる琵琶湖畔の長浜で  
あった。」（立川志らく、川本同書、158 頁）

「寅さんが美しい人妻 [典子＝かたせ梨乃]  
と出会う時節の表情豊かな琵琶湖の畔」

（五十嵐敬司助監督、川本同書、101 頁）

「寅さんとはじめて出会った典子が目を転じ  
て眺めた長浜の入江。小さな島がある。」（同）

#### 第 48 作「寅次郎紅の花」（1995＝平成 7 年）

ロケ地：岡山県津山市、勝山町、奄美大島  
加計呂麻 [カママ] 島、神戸市長田区

「冒頭、寅が歩く、昔の町並みが残る小さな  
町。岡山県の山間の城下町。人口一万人足らず  
の勝山。戦時中、谷崎潤一郎が疎開していた。」

（川本同書、93 頁）

「この映画では、甥の満男（吉岡秀隆）が、  
岡山県津山市の町に嫁いでゆく恋人の泉（後藤  
久美子）の結婚式を壊してしまうのだが、映画  
のスタッフは、ロケ地の津山の近くに、同じよ  
うに戦災に遭っていない古い城下町、勝山があ  
ると知って、寅の旅先にしたのである。」

寅が歩いた小京都ふうの通りには、現在、『男  
はつらいよ』ロケ地」の碑が誇らし気に建てら  
れている。」（同）

「岡山県の津山から山里のくねくねとした登  
り道を抜けて、美作滝尾 [ミツカキ] 駅についた。  
待合室の壁にはロケ時の写真が数点展示され、  
入り口近くに記念碑も立っていた。」

（西川幸夫、川本同書、102 頁）

「映画では、老人の駅員が駐在していたが、  
実際は切符の自販機もない無人駅。」（同）

「思いを寄せていた泉（後藤久美子）の結婚  
式をぶち壊してしまった満男は、自己嫌悪で発

作的に旅に出る。奄美大島から大島海峡を越えて、加計呂麻島へ。そこで出会った女性に世話になることになって、彼女の家に着くと、そこに居候していたのがなんと寅伯父さん。女性はリリー〔浅丘ルリ子〕だったのである。」

（松竹前掲書、125 頁）

「リリーの家の前、〔諸鈍〔シロトン〕長浜〕には樹齢300年の見事なデイゴの大き木が並んでいる。デイゴの並木は海からの風や潮を防ぎ、日中は木蔭になって島の人々から愛されている。」

（同）

「寅が1995年1月の大地震で大きな被害を受けた神戸の長田区の住民を見舞うのはご存知の通り。」（川本前掲書、93 頁）

### 3 分析のための覚書き

「内容分析」については、以下に前回と同じ項目を掲げ、新たなコメントを付す。

#### ① 「田舎」と「都会」の出現頻度

寅さんシリーズ後半の24作においても、コンクリートのビルが並ぶ、いわゆる「都会」が出てくることはとても少ない。

ただ、第41作ではウィーンやアムステルダムがメインのロケ地となったので、例外的に「都会」中心に描かれている。しかし、タイトルバックでは、それとバランスをとるかのよう、宮城県のローカルな鉄道の沿線風景が描かれる。

#### ② 「祭り・イベント」の出現頻度

各地方の祭りが描かれる場合が散見される。ただし、いくつかは地域からのロケ地誘致による場合があるようだ。

#### ③ 古い都市の「古い街並み」〔景観〕の有無

これについては、頻度がとても高い。特に「小京都」とも呼ばれる都市が多いが、必ずしも有名な街並みには限らず、監督

（あるいは助監督）の感性にかなった無名の街並みや景観が選ばれている。ただし、この場合でも、いくつかは地域からのロケ地誘致による場合がある。

#### ④ 有名な「ランドマーク」か否か

地方では有名な建造物や景観がさりげなく描かれている場合がある。字幕は用いられず、名称は看板などを映すことで示される。

#### ⑤ 「有名人」への言及

このシリーズ後半の計24作ではほとんどなかった。ただ、第31作で演歌歌手の都はるみが「京はるみ」としてではあるが、ほとんど「本人」として何曲かの歌を披露している。

#### ⑥ 過去の映画やドラマ等のロケ地となった場所

この点では、48作にものぼる寅さんシリーズ中の他の作品において、すでに一度（あるいはそれ以上）描かれた場所が、再び出てくるということがいくつかある（自己言及的）。

その他、偶然かもしれないが、第44作の岐阜県落合宿は、かつて他の作品の舞台になっている。

## 4 結 語

この寅さん映画シリーズで明らかなのは、ロケ地の選定とストーリーの展開との間に特にながりは無いということである。ただ、寅さんとマドンナがどこかで出会えさえすればよい。それ故に、観光地等からの誘致には合わせやすかったのだろう。

それで分かるのは、ロケ地選定は基本的には山田洋次監督の好みに従っているということだ。それに加えて、寅さんシリーズ後半の24作では、地方からのロケーション誘致があったこと

が、ところどころで記されている。前半の 24 作にはなかったことである。

具体的なロケ地の選定については、実際に「ロケハンチーフ」を勤めた五十嵐敬司助監督の思い出話が興味深かったが、残念ながら、五十嵐助監督が担当した、すべてのロケ地に関して記述されているのではなく、「思い出に残るロケ地」として計 15 作についてのみ記述がある（川本前掲書、94－101 頁）。

前回及び今回のような「資料」を作ってみると、この寅さんシリーズの映画では、製作当時の「時代の反映」となっているような「流行」や「変化」を捉える（そういう面も少しはあるが）というよりは、むしろ、時代によって「変わらない」、あるいは、むしろ「変化してほしくない」もの（特に景観や蒸気機関車のようなもの）が選ばれて撮影されているように思われる。なかには、撮影後、取り壊されてしまったような建造物もあり、「景観の記録」になっている場合もある。

自分たちの地域の姿を映画に残してもらった地方の人びとは、改めて、その美しさと掛替えのなさに気づいたのではないだろうか。

観客である我々も、この映画シリーズによって、日本にまだ残されている美しい自然や景観あるいは戦災に遭わなかった小さな城下町の数々を知ることになる。

#### <文 献>

水野博介「都市メディア論⑥「都市と映画」（その 2）事例研究：『男はつらいよ』をめぐって（分析準備編）」

『埼玉大学紀要 教養学部』第 47 巻第 1 号、205-213 頁、2011 年

川本三郎監修『寅さん完全最終本』小学館、2005 年

松竹株式会社映像版權室他編『教養・文化シリーズ 男はつらいよ パーフェクト・ガイド 寅次郎 全部見せます』日本放送出版協会、2005 年

佐藤忠男『みんなの寅さん 「男はつらいよ」の世界』朝日文庫、朝日新聞社、1992 年

#### < H P >

男はつらいよ松竹公式サイト

[www.tora-san.jp/toranomaki/movie17/story.html](http://www.tora-san.jp/toranomaki/movie17/story.html)